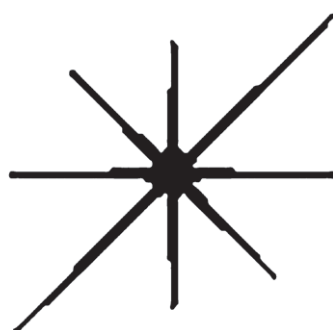


コメット通信 58

['25 年 5 月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

ナンセンスコメディのなかへ

——制度による臨床の風景

橋本和樹——3

【特集 オルダス・ハクスリー】

ハクスリーが描いた優生学的ユートピア／ディストピア

——『すばらしい新世界』と生殖の未来

加藤めぐみ——5

「あとは沈黙」

——ハクスリーが描く音の世界について

泉順子——7

オルダス・ハクスリーと『ジェーン・エア』

——そのさきにある複数の女性たち

猪熊恵子——9

オルダス・ハクスリーとモダニズム

秦邦生——12

オルダス・ハクスリーと人類学

小澤央——14

ナンセンスコメディのなかへ

——制度による臨床の風景

橋本和樹

フランスのラ・ボルド病院でスタージュ（研修）をしていた私は配属された病棟で働いていた。

「ピリピリキリリ！」

利用者やスタッフと一緒に朝のティータイムを楽しんでいるところだった。何やらおかしい声が聞こえた。誰かが動物の鳴き声の真似でもしているのか。まったりとした気分で朝のコーヒーを嗜んでいると、また「ピリキリ！」という甲高い声が耳に入ってきた。

さりげなく声の主を目をやると、その先には一人の見慣れない小柄な女性がスタッフにそう話しかけていた。まるで鳴き声のようだから「話しかけていた」と言うのは正確ではないかもしれないが、そうとしか言いようがない。言うならば彼女は「ピリ」と「キリ」の二語とそのリズムやイントネーションだけの音声記号で何らかの呼びかけを行っていた（ここでは「ピリキリ語」としておこう）。スタッフは、彼女のピリキリ語に「なに言ってるの？」と返答するのが精一杯だった。

面食らうスタッフに対し「ピリリリキリ！」彼女はまたそう返す。ぽかんと口を開けて戸惑う彼らを尻目に、彼女は無言でおいっとその場を立ち去った。私はその様子を映画のなかに映されたナンセンスコメディでも見ているような気持ちでただなんとなく眺めていた。

その日の午後、院内をぶらついてしていると道端でその彼女とばったりでくわした。私に近づいてくるなり彼女は「ピリピリピリキリキリ」と言った。「今朝と同じだ」そう思った私は「なるほど。それで？」そう返答した。すると彼女は、また「ピリピリピリキリ」と言った。

「それで君はどうしたの？」

「ピリリキリリ……」

そんなふうに彼女の「ピリキリ語」に対し、私はそれとなくただ相槌を打ち、話を続けた。そんなやりとりを何ターンか繰り返したあと、彼女は私に突然こう言った。

「ここにパンの工房があるの、知ってる？」

「え？ 知らない」

全く意味がわからないピリキリ語の映画は、唐突にフランス語に切り替わってもう二度とピリキリ語に戻ることはなかった。あたかも誰かが言語設定をピリキリ語からフランス語に切り替えたかのように。驚くべきことには、気がついたときにはもう、私自身が朝見たばかりのナンセンスコメディの登場人物になっていたのだ。

「あら、知らないの。案内してあげるわ、ついてきて」

彼女はそういって、パン窯のある建物や彼女の部屋がある病棟に私を案内した。そのあと少しして彼女は「街にある土産物屋にカズキを連れて行きたい」と言うようになった。

私が研究する「制度による精神療法」においてこのような要求は、そこに転移が生じていることを私たちに知らせてくれる現象だ。要求を迂回し欲望の方へ向かう、それが制度による精神療法である。そのあとクラブミーティングなどで相談した結果、私たちは他の数人と連れ立って街の美術館へ出かけることになった。

その日、図らずも私は偶然の出会いによっていつの間にか眺めていたナンセンスコメディの登場人

物になり彼女の精神療法の過程に参加することになったのだ。そこに作用しているのは精神分析で転移と呼ばれる現象である。

一般に精神分析において転移は、精神病圏では生じないと考えられている。しかし、実際にはそうではない。統合失調症における転移は、枝分かれして複数にまたがっている。質が異なっているだけで統合失調症においても転移は生じているのだ。このような「多参照的な転移」と呼ばれる現象は、あらゆる人・動物・もの・空間に対して生じる。

多参照的な転移は、医師・看護師などといった資格やステータスによって備給されるわけではない。「私はスタージュなので」と言って断ることなどできない。役割は与えられるものであり、自ら手に入れた国家資格というステータスとは異なる。転移によって与えられた役割を引き受けて初めて精神療法的関係が成立する。その人が看護師や給食調理員であろうと話は同じである。

多参照的な転移は、どこにでも生じうる。そのような転移を引き受けたとき、要求が生じる。その要求を「人が定期的集まることによって生じるものごと」という意味での制度のなかで迂回する。だからこそうりは「偶然をプログラムしなければならない」といっていたのだ。

あの朝、彼女とスタッフとのやりとりを目にしていなかったら、道端で彼女に出会わなかったら、あのとき彼女の「ピリキリ語」に話を合わせていなかったら、この物語はどうなっていただろうか。そもそも日本の病院のように、病棟で働いている時間に「ぶらつく」ことができなければどうか。

臨床において私たちが待っているのは、こうした「ほんのちょっとしたこと」に出会うことだ。それがこのように語ること、出来事がやってくることを可能にするものである。こうして事後的に語られうるような出来事、その登場人物になることこそ「制度による精神療法」の風景のなかにいるということなのである。

執筆者について――

橋本和樹（はしもとかずき） 1983年生まれ。作業療法士。現在、パリ第8大学博士課程、京都博愛会病院在籍。専攻＝制度による精神療法。主な論文には、「La psychothérapie institutionnelleにおける精神病の治療論――分裂した転移の備給と脱備給、要求の迂回路」（『I.R.S. ―ジャック・ラカン研究』、2024年）がある。

【特集 オルダス・ハクスリー】

ハクスリーが描いた優生学的ユートピア／ディストピア

——『すばらしい新世界』と生殖の未来

加藤めぐみ

20世紀を代表するディストピア小説の古典としてジョージ・オーウェルの『1984年』と双璧をなすオルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』。フォーディズムを人間の出生に適用したこの近未来の世界国家において、人は母体からではなく、受精卵を子宮外で育てる「体外発生（ectogenesis）」により「効率的」に管理、生産される。「孵化・条件づけセンター」で、まず卵の段階から5つの階級に遺伝子レベルで分化され、試験管から^{びん}壇に移された胎児たちは次に「社会階級決定室」で267日間、ベルトコンベアーで移動しながら、酸素や光の照射量の調節により、それぞれの階級に応じた能力や知性、身体的特徴を持つように処置が施される。アルファは知能が高いエリート層としてデザインされ、エプシロンは労働力として必要最小限の能力しか与えられない、というように。壇を出てからは「睡眠学習」により階級にふさわしい価値観を刷り込まれ、自らの地位に満足できるよう条件付けをされる。結婚、家族、出産、子育て、病、老化、死の不安や苦しみもなく、フリーセックスやドラッグを自由に楽しみ、嫉妬や怒りなど負の感情を抱いたときは向精神薬「ソーマ」で気分をリセットして、いつもハッピーでいられる。なんて「すばらしい世界」だろう！——これが、1932年にハクスリーが描いた近未来の「ユートピア」仕立ての「ディストピア」である。

なぜハクスリーは、いまから一世紀近くも前に、このような未来像を創造しえたのだろうか。実はこの世界は、19世紀末、英国のフランシス・ゴールトンが提唱し、20世紀初頭にはあらゆる学問分野、地域に広く浸透した「優生学」、とりわけ1920年代の改革派の優生学者が構想した「未来へのヴィジョン」を戯画的に表現したものといえる。優生学は19世紀末、大英帝国の繁栄に^{かげ}翳りが見えはじめ、このままでは英国が「退化」の一途を辿るのでは、との危機感から生まれた。社会全体が「進化」し続けるためには、国家が生殖を管理することで優れた血統を残し、劣った血統をなくさなくてはとして、「劣性」と見なす人々に対して隔離、断種、結婚の禁止、極端な例ではナチスのように安楽死を強制し（消極的優生学）、いっぽうで「優性」とされる人々の結婚を推奨しつつ、教育、経済面で母親業の支援を行った（積極的優生学）。そして当時の最先端の遺伝学、生物学に通じた改革派のJ・B・S・ホールデンは、1923年に発表した『ダイダロス、または科学と未来』で、それまでの優生政策とは異次元の「遺伝子レベル」からの国民の質の改良方法として「体外発生」を提唱したのである。

人類はどこに向かっていくのか？と未来への期待と不安が高まった戦間期イギリスで、ラウトレッジ社の前身、キーガン・ポール・トレンチ・トリュブナー社は、人類、国家、科学、宗教、結婚制度、文学からスポーツまで、ありとあらゆるテーマについて、100年後の未来を予想する原稿を各分野の専門家に依頼して100冊以上の小型本のシリーズ、〈現代・未来〉叢書（*To-day and To-morrow*, 1923-1931）を出版した。『ダイダロス』はその第1冊目として注目を集め「体外発生」は論争を巻き起こすこととなる。ホールデンは「体外発生」が普及した100年後の未来を「人類の大きな進歩」と楽観的に捉えていたが、フェミニスト作家のヴェラ・ブリテンは『ハルシオン、あるいは一夫一婦制の未来』で女性と子供との関係に与える影響の観点から「体外発生」は技術的に可能になってみずれ廃止されるはずと批判した。社会学者のジェフリー・ウィークスは「体外発生」論争が起きた1920年代は「生殖をもっとコントロールしたいという欲望に人々が取り憑かれた時代」だったと分析する。マリー・

ストープスらの産児制限運動の影響もあり、避妊が普及しはじめたものの、出産による母親の死亡率は相変わらず高く、女性たちは出産、育児を負担と感じていた。いっぽうで第一次大戦後の人口減少への不安感もあったため、生殖技術の飛躍的な進歩の次のステップとして「体外発生」に優生学的な期待と関心が寄せられたのである。

ハクスリーは1921年出版のデビュー作『クローム・イエロー』にすでに「巨大な国家の孵卵器」で人間が生み出され、家族制度がなくなる未来を予見しているの、『ダイダロス』から影響を受けたというより、ホールデンと思想的磁場を共有する仲間であり、ハクスリーなりの「体外発生」に対する見解をフィクションの形で示したともいえるだろう。そして英国での「体外発生」論争から100年となる2025年。ハクスリーとは違った「体外発生」が一般化した近未来の日本を舞台にしたユートピア／ディストピア物語が生まれた。村田沙耶香は『世界99』で、工場で人間が大量生産されるのではなく、家庭内で飼う高価な愛玩動物、かわいいピョコルンが人間の性欲処理、妊娠、出産から家事までも担ってくれる21世紀版の「すばらしい新世界」を描いた。果たしてここから新たな「体外発生」論争が起きるだろうか。

【参考文献】

- Brittain, Vera. *Halcyon, or the future of Monogamy*. Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1929.
- Haldane, J.B.S. *Daedalus, or Science and the Future*. Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1923.
- Huxley, Aldous. *Crome Yellow*. Chatto & Windus, 1921.
- . *Brave New World*. Chatto & Windus, 1932. (『すばらしい新世界』黒原敏行訳、光文社古典新訳文庫、2013年。)
- Saunders, Max. *Imagined Futures: Writing, Science and Modernity in the To-Day and To-morrow Book Series, 1923-1931*. Oxford University Press, 2019.
- Squier, Susan Merrill. *Babies in Bottles: Twentieth-Century Visions of Reproductive Technology*. Rutgers University Press, 1994.
- . *Liminal Lives: Imagining the Human at the Frontiers of Biomedicine*. Duke University Press, 2004.
- Weeks, Jeffrey. *Sex, Politics and Society: The Regulation of Sexuality since 1800*. Addison-Wesley Longman Ltd, 1981.
- 加藤めぐみ「バイオポリティカル・イングランド——フェミニズムと優生学が描く未来へのヴィジョン」『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』遠藤不比人、加藤めぐみ他編、研究社、2008年。
- 村田沙耶香『世界99 上下』集英社、2025年。

執筆者について——

加藤めぐみ（かとうめぐみ） 1967年生まれ。現在、都留文科大学文学部英文学科教授。専攻＝英語圏文学。小社刊行の主な著書には、『カズオ・イシグロと日本——幽霊から戦争責任まで』（共著、2020年）、『ジョージ・オーウェル『1984年』を読む——ポスト・トゥルースからディストピアまで』（共著、2021年）、『マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む——フェミニスト・ディストピアを越えて』（共編、2023年）などがある。

【特集 オルダス・ハクスリー】

「あとは沈黙」

——ハクスリーが描く音の世界について

泉順子

社会はユートピアに向かって進んでいる。おそらく今、新しい時代が始まろうとしているのだろう。[……] より“完璧”ではない、もっと自由な、非ユートピア的社会に戻る方法を夢想する時代が。
——ニコライ・ベルジャエフ⁽¹⁾

対照的な音の情景を見せる物語のはじめと終わりは、『すばらしい新世界』（1932）の究極的なユートピア願望がなにかを伝えているように思われる。ノイズに満ち、活力にあふれ、高度な生殖技術を誇る世界国家の前途洋々たる未来への賛歌によって幕を開けるこの作品は、終生アウトサイダーとして生きざるを得なかった「野蛮人」ことジョンの孤独、自死、そして沈黙でもって幕を閉じる。この小稿ではハクスリーの描く音の世界に着目し、冒頭に引用したこの作品のエピグラフに示された願いがジョンの最期に投影されているかもしれないことを論じてみたい。

この作品が描く AF（フォード紀元）632 年の世界国家は、ハクスリーと同時代の作家ジョージ・オーウェルが『1984 年』（1949）で描いたような絶望感の漂う、救い難いディストピアではない。むしろそれは統治者ムスタファ・モンドが長年苦勞して築き上げたユートピア（のはず）である。ここでは誰もが満ち足りて幸せに暮らせるようにと様々な仕掛けがあつて、音も大きな役割を果たしている。人々がこの楽園で充足感を増し、快樂に浸り、苦痛や苦惱を抱えずに暮らせるように様々な音が生成され、共同体の隅々にまではびこり、彼らの生を覆いつくしている。

もちろんハクスリーの描いたサウンドスケープは、ユートピア小説ならではの諷刺的叙述でもある。騒音とノイズが進化の証となった産業革命の時代を経て、「音の地獄」と呼ばれた第一次世界大戦とその後の第二次世界大戦の間に出版されたこの作品では、歴史家のアラン・コルバンの言葉を借りれば、「社会は音に服従するようにと命ずる。自らの内なる声に耳を傾けるよりも、全体の一部であるという。かくして個人の構造そのものが変更された」⁽²⁾ ところからさらに先の未来社会が描かれる。いまや人間の感性は騒音への欲望に依拠し、生きるとは音をたて続けることといわんばかりに、人々は喋り続け、笑い続け、あちこちと忙しく動き回り続けている。そして何よりも彼らはひどく沈黙に怯えている。

しばしば「滑らか（smooth）」とか「ひびのない（flawless）」と形容されるユートピアの例に漏れず、ハクスリーの世界国家も完璧さを誇る（美しいレーニナのきめ細やかな肌はその象徴である）。ところがそこにひびを入れようと試みる無作法者が出現する。世間できずもの扱いを受けている二人の男性、つまり周囲からの輦蹙を意に介さず静寂と沈黙をことさら求めるエリート階級のバーナードと「野蛮地区」からの訪問者ジョンである。

この二人の交流は、ユートピア／ディストピア作品群のなかで異彩を放つこの物語の特色ともいえるものだ。ユートピア小説がとる構造には、主人公が新境地を発見・訪問し、そこで見聞したことを帰還してから伝えるというものが多い。他方でディストピア小説では、絶望的な悪夢のような世界からどうにか脱出しようと試みる主人公が描かれる。つまり、ユートピアとディストピアでは主人公の出入りが逆行するわけだが、ハクスリーの『すばらしい新世界』の面白さはこの双方向の動きが交差

している点にある。この樂園で苦情を並べ立てたかと思うと妙な外国人を連れてきて反社会的な行為に手を染めるバーナードと、期待に胸を膨らませて意気揚々と母親の故郷に移住するも世間を騒がせ、その挙句に「不幸になる権利」を主張して隠遁生活を始めるジョン——生い立ちがまったく違うにも拘わらず、ともに沈黙と静寂に魅せられた二人の「はみ出し者」の異端的行為は、どこか胡散臭いこのユートピアを覆う殻を破り、もともとは「どこにもない (nowhere)」という意味をもつユートピアの原風景に立ち返ろうというささやかな抵抗にみえてくる。

物語の終盤、畑仕事の最中に母親の死を思い出し、悶々とするジョンの脳裏に『ハムレット』の科白が次々と浮かぶ。なかでも ‘For in that sleep of death, what dreams?’ (「氷の眠りにつき、そこでどんな夢を見る?」)⁽³⁾ という言葉に心をえぐられ、彼はその場に立ち尽くす。だがこの問い掛けに応える間もなく、物語は読者を戦慄させるほどの狂気に満ちたグロテスクな騒乱場面へと移り、そこで犯した過ちに耐えきれず「氷の眠り」を求めて首を吊ったジョンの痛ましい終焉へと一気に進む。

物語の終焉と重なるジョンの最期は、どうにもならない閉塞感のなかで自らを追い詰めたひとりの男性の悲劇であることを伝えつつも、その死を敗北として落着させない、どこか不思議な余韻を残している。なぜなら意識的な沈黙という終わりかたそのものに、物語では口にされないハムレットの言葉が甦ってくるからだ——‘The rest is silence’ (「後は沈黙」)。無言を貫きながら方位磁石の針のように振れ続けるジョンの敢行は、「どこにもない」ユートピアをなんとか探し当てようとしながら、あらゆる〈存在〉(ノイズを生み続ける生者たち)に抗おうとする〈無〉への願望ではないだろうか。

【注】

- (1) オルダス・ハクスリー『すばらしい新世界』黒原敏行訳、光文社古典新訳文庫、2013年。
- (2) アラン・コルバン『静寂と沈黙の歴史』小倉孝誠・中川真知子訳、藤原書店、2018年。
- (3) ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』小田島雄志訳、白水社、1983年。

執筆者について——

泉順子(いずみよりこ) 1973年生まれ。現在、東北学院大学文学部英文学科教授。専攻＝イギリス小説・文化研究。主な著書には、『「プリンセス・ダイアナ」という生き方——「自尊」と「自信」への旅』(丸善プラネット、2019年)などがある。

【特集 オルダス・ハクスリー】

オルダス・ハクスリーと『ジェーン・エア』

——そのさきにある複数の女性たち

猪熊恵子

「もし映画を見に行くなら [……], 『ジェーン・エア』 もいいわよ, オルダスが作ったの。子供時代のエピソードあたりは素晴らしくて感動するわ。他のところはちょっとメロドラマチックで単調だけど」。これは 1944 年 1 月 9 日, ハクスリーの妻マリアがグレース・B・ハブルに宛てた書簡の一部である⁽¹⁾。さかのぼってこの映画制作時 (1941 年 11 月 17 日) に書かれたハクスリー自身の書簡には, 「しんどい仕事だがやらないわけにもいかない……映画仕事のほうが, 浅薄な記事や物語を書き散らしているよりはいいわけで」という気のない様子が見え隠れする⁽²⁾。アメリカ移住後のハクスリーが映画脚本執筆によってかなりの収入を得ていたことは周知の事実だが, 「やらないわけにも」という本人のぼやきか, 妻の指摘する映画全体のメロドラマ的トーンか, いずれが影響したのだろう, ハクスリー映画への批評的関心は一樣に薄い。しかし本コラムではあえて 1943 年映画『ジェーン・エア』を取り上げ, その脚本の陰に明滅する複数の女性たちに光を当ててみたい。

この映画最大の特徴は, 原作の重要人物を大胆 (すぎるほど) にカットしていること, だろう。バーサ役の俳優はおらず (当時の厳しい映画検閲に引っかかることを恐れ, 彼女の姿は作品中一貫して不在の存在として提示される), ミス・テンブルは存在さえ描かれない。さらなる物語の簡略化と時間の節約のためだろうか, セント・ジョン・リヴァーズの存在もムーア・ハウスにまつわるエピソードもすべて抹消され, いきおいジェーンの遺産相続もダイアナやメアリーとの友情も描かれることがない。ただしこれだけ多くの人物たちが消された作品のなかで見過ごせないのは, ゲーツヘッドの屋敷で侍女をつとめるベッシーが, 原作内での役割をはるかに凌ぐ／それとはまったく異なる存在感をもって描かれていること, だろう。実際, 原作では「何をやらせても要領のよい」「スリム」で「若い」侍女⁽³⁾として描かれたベッシーを演じたのは, 撮影時すでに 60 歳を超えていた女優サラ・オールグッドであり, 母か祖母のようにジェーンを慈しむ映画内のベッシーは, ローウッドへ行くジェーンに自分のブローチを贈る⁽⁴⁾。ジェーンもまた, これを幾度となく身に着けることで, 一貫してベッシーへの思慕を示す。当時母親役を演じる女優として人気のあったオールグッドを起用した配役からも⁽⁵⁾, その他多くの点からも, この映画がジェーンの自我の目覚めやその確立を描こうとはせず, 孤児ジェーンがベッシーという母の代補を慕いながら幸せな結婚へと至るまでの一本道を「メロドラマチック」に提示していることは否めない。

とはいえアダプテーション映画と原作の間の違いを指摘しつつ, 現代的コンテキストから見た制作時の時代精神の古さを難じるのはあまりに素朴というものだろう。そしてハクスリーおよび他の脚本家たちの「古い」ジェーン表象が, やむを得ない妥協の産物であったのか, または彼らの保守的女性観を浮き彫りにするものであったのか, これを論じることに益があるとも思えない。むしろ注目したいのは, ここに新たな可能性が照らし出されることである——この映画は, 小説『ジェーン・エア』批評においてさえ長らく等閑視されてきた「ベッシー」という人物に, 逆説的な形であれ光を当てているのだから。

事実, 小説『ジェーン・エア』冒頭に展開するジェーンとリード夫人の対話は, はからずもベッシーという人物の重要性をひそかに示している。物語が幕を開けて早々, 家族の幸せな連帯から一人疎

外されるジェーンは、「もっと愛想よく子供らしい性格」になれるように努力しなさい、「お前が一生懸命に努力しているということをベッシーから聞くまでは」、または「私のこの目で確かめるまでは」、お前を仲間に入れるわけにはいかないの、とリード夫人から告げられる。ジェーンはそんな夫人に対して「ベッシーは私が何をしたと言っているのでしょうか？」と尋ねるが、「もっと感じよく話せるようになるまではお黙りなさい」という冷たい返答で切り捨てられる⁽⁶⁾。ここで興味深いのは、周縁化されたジェーンと、それに相対して中心にいる（またはジェーンという周縁を得ることによって中心性を獲得する）リード夫人との短い対話が、常にベッシーという特定の第三者の言説によってつながれていること、だろう。沈黙を強いられ声を奪われるヒロインに対して、代わりにその存在を規定する言説主体となりうるのは、テキスト冒頭において誰だろうベッシーなのである。

さらにここで『ジェーン・エア』とジーン・リース『サルガッソーの広い海』（以下『広い海』）を論じたスピヴァクの古典的批評を思い返してみれば、ベッシーの重要性は一層増すように思われる。スピヴァクはいみじくもテキスト冒頭に登場する召使クリストフィーヌをして「（『広い海』の）テキストに初めて現れる解釈者であり名前を持つ主体」と定義した⁽⁷⁾。ならば『ジェーン・エア』冒頭でリード家におけるジェーンの「解釈」を司る言説主体として名指されるベッシーは、クリストフィーヌの鏡像的立場にある（またはクリストフィーヌがベッシーの鏡像的立場にある）、とは考えられないだろうか。そしてクリストフィーヌの物語が、スピヴァクの論じるようにアントワネットの語る『広い海』主筋に対する伏線となり、全体の物語を下から掘り崩すものとして存在するのだとしたら⁽⁸⁾、ベッシーの言説とジェーンの主筋の物語との関連もまた、原作小説中で見逃せない重要性を有するのではないだろうか。

これ以上の分析は、紙幅の都合上別の場所に譲らざるを得ない。したがってここでは、図式的に整理しすぎぬようにと注意しながら、以下のようにまとめておこう。ハクスリーが脚本を書いた1943年の映画『ジェーン・エア』は、女性としてのジェーンの自立を描こうとはせず、多くの重要人物たちを抹消した代わりに、母なるベッシーという人物を新たに創出してみせた。しかしこの保守的なメロドラマ映画から20年ほどのちに書かれた『広い海』では、ベッシーと同じ機能と立ち位置を得ながらもまったく異なる立ち回りをするクリストフィーヌという女性が描かれ、男性的／西洋的な物語言説の限界を浮き彫りにしてみせた。そうであるとしたら、この映画は従来の『ジェーン・エア』批評が見過ぎてきた豊かな可能性を、密かに、意図せぬ形で示唆するものなのかもしれない。ハクスリーが気乗りせずに作った映画のなかには、古典的フェミニズム・テキスト『ジェーン・エア』に描かれた「ベッシー」という人物とその言説を、そしてそれらとヒロインの声との関係性を、今一度読み直してみるためのきっかけが、たしかに隠されているのだから。

【注】

- (1) The Huntington Digital Library. Maria Huxley writes to GBH. <https://hdl.huntington.org/digital/collection/p15150coll7/id/7270>. Accessed 16 May 2025.
- (2) Huxley, Aldous. *Letters of Aldous Huxley*. Edited by Grover Smith, Chatto and Windus, 1969, p. 471.
- (3) Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Beth Newman, Bedford/St. Martin's, 1996, p. 40.
- (4) *Jane Eyre*. Directed by Robert Stevenson, performances by Orson Wells and Joan Fontaine, Twentieth Century Fox, 1943, 5:52-6:03.
- (5) Atkins, Elizabeth. "Jane Eyre 'Transformed.'" *Literature/Film Quarterly*, vol. 21, no. 1, 1993, p. 55.

- (6) Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Beth Newman, Bedford/St. Martin's, 1996, p. 20.
- (7) Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Women's Texts and a Critique of Imperialism." *Critical Inquiry*, vol. 12, 1985, p. 246.
- (8) Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Women's Texts and a Critique of Imperialism." *Critical Inquiry*, vol. 12, 1985, p. 247.

執筆者について——

猪熊恵子（いのくまけいこ） 1979 年生まれ。現在，東京科学大学准教授。専攻＝イギリス 19 世紀小説。主な著書には、『二〇世紀「英国」小説の展開』（共著，松柏社，2020 年）などがある。

【特集 オルダス・ハクスリー】

オルダス・ハクスリーとモダニズム

秦邦生

1962年にハクスリーの『恋愛対位法』(*Point Counter Point*, 1928)の邦訳を岩波文庫から刊行した英文学者の朱牟田夏雄は、その「解説」において戦前を振り返って、はやくも1930年前後には日本の一読者としてハクスリーの作品に親しんでいたと証言している。1906年生まれ、朱牟田は20代半ばの頃にハクスリーを次々に読み漁り、「英文学にもわれわれと同じ空気を吸い同じ感覚でものを受け取る作家がいる!」と深い喜びを味わっていたという。この回想が興味深く思えるのは、二つの世界大戦という悲劇に挟まれた「戦間期」のイギリスと、地理的にはそこから遠く離れていた当時の日本の文化状況の共鳴関係を物語っているように思えるからである。

英文学における狭義の「モダニズム」とは、主に1920年代に最盛期を迎えた実験的な動向を指す言葉であり、詩人ではT・S・エリオット、小説家ではジェイムズ・ジョイス、ヴァージニア・ウルフ、D・H・ロレンスなどがその代表格と目されることが多い。未曾有の死傷者を出した第一次世界大戦(1914-1918)後に花開いたこの文学・芸術動向の台頭には、戦後の幻滅感と、旧弊な権威や価値観に対する反発が後押しとなっていた。ただし、上に名を挙げた代表的なモダニスト作家たちがみな1880年代の生まれであったのに対して、1894年生まれのハクスリーはだいぶ年少である。当時の彼は早熟な作家としてデビューし、1920年代の不安定な世相を巧みに反映した作品を矢継ぎ早に世に問うていたのであり、その感受性の瑞々しさこそが朱牟田のような当時の日本の若い読者を惹きつけた要素であったことは想像に難くない。

ハクスリーは1913年にオックスフォード大学に入学、大戦中に良心的徴兵忌避者となったブルームズベリー・グループの知識人たちが集ったガーシントン・マナー(レディ・オットリー・モレルの邸宅)に足繁く通うようになり、ウルフ、ロレンス、キャサリン・マンスフィールド、リットン・ストレイチーなど年長の作家たちとの交流から大きな刺激を受けた。1916年に初の詩集『燃える車輪』(*The Burning Wheel*)を刊行した彼は、エズラ・パウンドの影響下にあった小雑誌『エゴイスト』の寄稿者となり、1919年からはジョン・ミドルトン・マリ(マンスフィールドの夫)が編集主幹を務めた『アシーニウム』誌の編集陣に加わるなど、モダニズム運動の人脈に深く関与していた。

しかしながら、初期のハクスリーの作品は、詩も小説も才気走った皮肉の切れ味や題材の現代性にもかかわらず形式的にはきわめて伝統的であり、ウルフやエリオットにはそれほど高く評価されなかったようだ。ガーシントン・マナーのボヘミアン共同体をモデルとした小説第一作『クローム・イエロー』(*Crome Yellow*, 1921)はアメリカの雑誌でスコット・フィッツジェラルドにその「洗練」を高く評価されたものの、その諷刺的筆致によって、親しかったオットリー・モレルなどを遠ざけることになってしまった。しばらくイタリアに滞在した彼は1926年頃からロレンスとの親交を深め、その特異な〈生〉の思想と反近代主義に深い影響を受けるようになる。だが、知的エリート層出身であくまで頭脳的なハクスリーと、対照的に労働者階級の出自を持ち、身体性の復権を唱えたロレンスとのあいだには、乗り越えがたく深い懸隔も存在していた。

最初に挙げた『恋愛対位法』は、盛期モダニズムに並走したこの時期のハクスリーの頂点と見做せる実験作である。ハクスリー自身を仮託した作家フィリップ・クォールズが手記で小説論を展開

するなどのメタフィクション的仕掛け——アンドレ・ジッドの『贋金づくり』(*Les Faux-monnayeurs*, 1925) にインスパイアされた要素——に加えて、本作は音楽の「対位法」を模して複数のサブプロットが交錯しつつ並走する複雑な構成を持つ。ロレンスをモデルとした画家ランプトンが語る激烈な近代社会批判も興味深いが、よりきな臭い政治的要素を内包していることも本作の大きな特徴だろう。具体的には、下層階級の不満を代弁するイリッジ、原ファシスト的な政治団体を率いるウェブリー（政治家オズワルド・モズリーをモデルにしたのではと言われている）などである。いわば本作においては彼らを代弁者として、一般には 1930 年代の「政治の季節」と連想される諸要素が、1920 年代のモダニズム的作家・芸術家のコミュニティに徐々に侵入しつつあるのだ。この点は、諷刺的作家として世相の変化を敏感にとらえたハクスリーの面目躍如と言えるだろう。

ただし、上述のウェブリーを含む複数の登場人物たちが立て続けに死を迎えるこの小説のエンディングは、新たな政治的動向への期待感よりも、この時点のハクスリーの同時代文化・社会への根の深い幻滅感・絶望感をより強く伝えているように思われる。ニヒリスト的な若者たちに殺害されたウェブリーの屍体が炭素、珪素、燐、硫黄などの化学物質へと分解されてゆくプロセスを予見する不気味な語りは、(ランプトン＝ロレンスの言葉を真に受けるなら) 拒絶すべき近代文明の物質主義にみずからすすんで感染して、人間存在そのものを魂を持たない物質に還元するかのようである。その自家中毒的なアイロニーという点では、彼のもっとも有名な作品である『すばらしい新世界』(*Brave New World*, 1932) を部分的に先取りする側面も見られるだろう——それが先見の明であったのか、それとも、鋭い才気ゆえにかえって深くはまり込んでしまった袋小路であったのかは、評価の分かれるところだろうが。

執筆者について——

秦邦生（しんくにお） 1976 年生まれ。現在、東京大学大学院総合文化研究科准教授。専攻＝イギリス文学。小社刊行の主な著書には、『カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む——ケアからホロコーストまで』（共著、2018 年）、『カズオ・イシグロと日本——幽霊から戦争責任まで』（共編、2020 年）、『ジョージ・オーウェル『1984 年』を読む——ポスト・トゥルースからディストピアまで』（編著、2021 年）がある。

【特集 オルダス・ハクスリー】

オルダス・ハクスリーと人類学

小澤央

20世紀前半のモダニズム文学を考えるうえで人類学の文脈は無視できない。英国の人類学は19世紀末から20世紀前半に急速に発展した。机上の学問だった人類学を、プロニスワフ・マリノフスキがフィールドワーク、特に参与観察を基礎とする実証的学問へと転換したのだ。新しい人類学に刺激された作家は数知れない。オルダス・ハクスリーもそのひとりである。彼は1929年の書簡で、マリノフスキの『未開人の性生活』（1929年）を読んでいたなら『紳士淑女の性生活』を書いてみたくなかったと告白している。こうして生まれたのが『すばらしい新世界』（1932年）だ。

『すばらしい新世界』が描く26世紀の世界国家は、科学技術や全体主義に依拠する「文明」を誇るが、これは人類学を応用した結果でもある。家族や単婚制の廃止、性的放縱の推奨は、フロイト理論のみならずマリノフスキやマーガレット・ミードによる「未開社会」の報告（今日では疑わしい記述も含まれる）に基づく。一方でニューメキシコにあるとされる「野蛮人居留地」では旧来の文化や習慣が守られており、こちらの描写は、作者の親友D・H・ロレンスの紀行文やスミソニアン研究所の『アメリカ民族学局年報』などに負っている。重要なのは、ハクスリーが人類学を参照しつつ、想像力を駆使して未来を描いている点だ。文明社会と未開社会は単純に対置されておらず、文明と未開の関係はしばしば攪乱される。シェイクスピア作品が未開とされるように、そもそもこの小説が用いる文明、未開／野蛮の概念は通常の意味からずれている。

興味深いことに、『すばらしい新世界』には人類学者を彷彿とさせるキャラクターが登場する。居留地を訪問する心理学者バーナード・マルクスは、現地の生活や儀式を観察し、「野蛮人」ジョン（文明人の両親を持つが居留地で育った）から熱心に話を聞く。その結果を世界統制官ムスタファ・モンドに報告すると、人類学に造詣の深いこの元科学者は野蛮人をロンドンに連れてくるよう命じ、さらに文明社会のさまざまな場所を彼に見せ、その反応を観察し報告するよう指示する。野蛮人は文明に嫌気が差し荒野で自給自足の生活を始めるが、写真家ダーウィン・ボナパルト（ケアリー・J・スナイダーによれば、博物学者と征服者を兼ね備えた姓名）により記録映画に収められ、商品として大衆に消費される。

ハクスリーが知っていたかどうかは不明だが、文明社会のジョンと同じような経験をした「未開人」は実在した。アメリカ先住民ヤヒ族の最後の生存者といわれたイシ（1861年頃～1916年）は、「野生」生活を送ったのち、1911年に都市近郊で保護された。カリフォルニア大学サンフランシスコ校に引き取られ、アルフレッド・クロバーら人類学者の研究対象となり交友関係を結ぶ。ジョンと同様、文明社会の各所に案内され、その反応はメディアにより報じられ、好奇の対象として消費された。意義深いことに、ジョンと疑似人類学者の関係は、イシと人類学者の関係の風刺として読める。長い間、イシと人類学者は固い友情で結ばれていたとされてきたが、1990年代頃より疑問視され、イシを展示物のように博物館に住ませたことが人道的に許されるのかといった批判も出てきた。観察と消費の対象に甘んじないジョンは、イシの語られなかった気持ちを代弁しているのかもしれない。

『すばらしい新世界』は、人類学的手法を本国に適用しようとする同時代の傾向を想起させる。1930年代に植民地独立運動が高まり大英帝国が拡大を望めなくなると、英国本国が注目を集め、英国性を

再定義する試みが盛んになった（ジェド・エスティ『縮小する島』，2004年）。ハクスリー自身，エッセイのなかで，大量失業に喘ぐ炭鉱町の実情を紹介したり，人類学を英国の社会改革に応用すべきだと主張したりしている。しかし『すばらしい新世界』が特異なのは，英国性はおろか英国さえも存在しない時代を予見することで，当時の人々が必死に求めている国民性などは幻想にすぎないと喝破している点だろう。

『すばらしい新世界』における人類学や人類学者への風刺は，20世紀後半以降の人類学批判と重なる部分もある。「被植民者を表象する」（1989年）のなかでエドワード・W・サイードは，人類学に内在する観察者（≡西洋人）と被観察者（≡非西洋人）の不均衡を問題視し，人類学が生まれ変わるには，被植民者の「対抗言説」を取り入れて「他者」との関係をより平等にし，アイデンティティや文化を柔軟に理解する必要があると主張した。ジョンの文明批判は居留地住民の対抗言説としては弱い，彼と疑似人類学者との友情や軋轢は，人類学者と「他者」の理想的関係を示唆し，異なる文化的要素を内包するジョンの複雑なアイデンティティは，文化やアイデンティティへの柔軟な理解を促している。

その後もハクスリーは人類学に並々ならぬ関心を抱いていたが，それが最も顕著にわかるのは自伝的小説『ガザに盲いて』（1936年）だ。人類学を「愛」に基づく実践的学問と定義する人類学者は，メキシコなどでのフィールドワークから非暴力の有効性を確信し，ヨーロッパで反戦運動を組織する。彼を師と仰ぐ主人公がついに到達する「統一」の思想（人類を含む全存在が時空を超えてつながっていると見る見方）には，作者の友人ジェラルド・ハードの神秘哲学に加え，ルース・ベネディクトの『文化の型』（1934年）からの影響もうかがえる。今日の視点からは，ハクスリーの人類学観，人類学者像には白人，男性，英国人のエリート主義が見られないわけではない。それでもハクスリーが人類学を受容することで，知性に過度に依存した冷笑主義者から，他者に対してより共感的な理想主義者へと自己変革を遂げたことは確かである。

執筆者について――

小澤央（おざわひさし） 1983年生まれ。現在，法政大学文学部英文学科准教授。専攻＝英文学，ユートピア文学・思想。主な著書には，*Orientalism and Reverse Orientalism in Literature and Film*（共著，Routledge，2021年），*Huxley, ce méconnu*（共著，Effigi，2025年），主な訳書には，サンダー・L・ギルマン『肥満男子の身体表象――アウグスティヌスからペープ・ルースまで』（共訳，法政大学出版局，2020年）などがある。

水声社の新刊

(2025 / 5 / 30)

【6月の新刊（予定）】

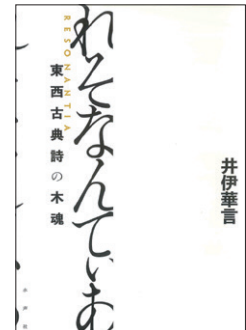
れそなんていあ——東西古典詩の木魂

井伊華言

【6.4 発売】

▶ギリシア・ラテンから古代中国、日本まで、古典詩人約 80 名の作品に、戯評・感想・パロディからなる詩による返答＝〈れそなんていあ〉を詠む、前代未聞の詩集。元西洋古典学徒・奇人井伊華言老がこの世の名残に放つ〈最後っ屁〉。

A5 判上製／ 177 頁／ 3000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0873-1



異邦人のフランス語圏文学

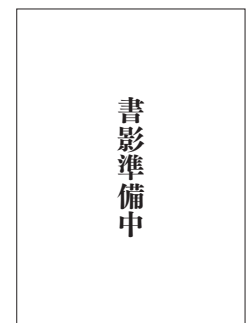
——立花英裕と「世界 - 文学」の想像力

谷昌親＋中村隆之編

【6.23 発売】

▶ロートレアモンから出発して、マルティニック、ハイチ、ケベックの文学へと多様に展開された、知の越境者の旅路。歴史の他性にかかれた文学的思考から、われわれは何を受けとるべきか。ネーションへの同化でもなければ、グローバル化の伸展でもない、時空の異なる作品に張り巡らされた世界の複数性を読解する。

A5 判上製／ 464 頁／ 6500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0878-6



都市のコラージュ——美術・生活・歴史

坂上桂子編

【6.23 発売】

▶人々が土地を切り拓き、立ち止まり、交わり、住み着き、また通り過ぎゆくなかで、歴史は絶え間なく堆積し、都市の姿が立ち上がる。市場、街路、家屋、銅像、詩篇、雑誌、Web 画像、グラフィティ、シアター、モニュメント……記憶・文化が織り成す動的な現象としての都市をさまざまな断片から読み解く試み。

A5 判上製／ 336 頁／ 5000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0877-9



異説ダダ・シュルレアリスム

塚原史

【6.27 発売】

▶ダダ・シュルレアリスムにまつわる「通説」を退け、100年の時を経た現代においてアヴァンギャルド運動に新たな息吹をもたらすべく、ツァラ、ブルトンの知られざる一面に光をあて、よりラディカルな運動レトリズムの可能性を論じる、過激なガイドブック。

A5 判上製／464 頁／6500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0841-0



抽象表現主義——戦後ニューヨークの前衛芸術家たちはいか

にして自分たちの歴史を自分たちで作ったか

大島徹也

【6.27 発売】

▶美術学校運営、討論会、抗議運動、集会所設立、展覧会企画……ときに対立しながらも芸術家たちが自主的に取り組んだ知られざる集団活動、〈抽象表現主義〉。その考察を通して、新たな抽象表現主義史を提示する。

A5 判上製／404 頁＋別丁1 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0876-2



哲学以後の芸術とその後

——ジョゼフ・コッスス著作集成 1966-1990

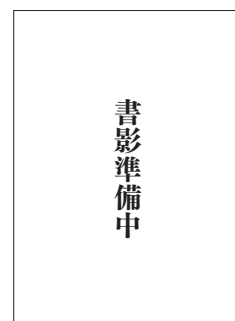
《叢書 芸術／言語》

ガブリエレ・グエルチヨ編 鍵谷怜訳

【6.27 発売】

コンセプチュアル・アートの旗手が紡ぎ出す思考の軌跡。芸術の哲学的・言語学的転回を印づけた記念碑的作品「哲学以後の芸術」をはじめ、引用のみからなるテキスト「27 個のパーツからなる論説」、人類学への深い関心を記した「人類学者としての芸術家」など、45 編を収録。

A5 判上製／512 頁＋別丁36 頁／8000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0874-8



【5 月の新刊（既刊）】

漂流する思考

新形信和

【5.1 発売】

▶日本人の思考は漂流する。思考がむなしくさまよい、思考が本来持っている現実を変革する力を失い、現状に流される。現在の日本のさまざまな領域に見られる停滞はこのような思考の漂流によって生じているのではなからうか。

46 判上製／288 頁／2500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0868-7



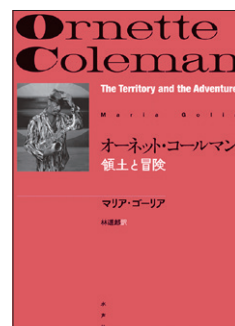
オーネット・コールマン——領土と冒険

マリア・ゴリア 林道郎訳

【5.1 発売】

▶前人未踏の領域を切り開き、20世紀を震撼させた《フリー・ジャズの闘士》。同時代の広大な社会・文化的ネットワークを踏破し、膨大な証言の中から新たなオーネット像を描き出す、画期的評伝！

A5 判並製／381 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0866-3



中村真一郎手帖 20

中村真一郎の会編

【5.6 発売】

▶東西古典詩の翻訳『古韻余響』から訳詩家としての中村真一郎の姿に迫る講演、中村の『王朝文学論』を読み解き「ロマネスク」をめぐるその文学観を明らかにする講演ほか、論考・エッセイを多数収録。

A5 判並製／88 頁／1000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0867-0



風に舞う塵のように

《フィクションのエル・ドラード》

レオナルド・パドゥーラ 寺尾隆吉訳

【5.26 発売】

▶キューバから亡命した若い男とアメリカ生まれのキューバ系女性が出会い、互いのルーツを確かめあうなかで、キューバの光と闇を生きたある一族の歴史に行きあたる——壮大なスケールで社会主義国家キューバに生き、そして離散した人々の生を描いてベストセラーとなった〈キューバ国民たちの年代記〉。

46 判上製／684 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0870-0



ベッドがあれば

《叢書エル・アトラス》

アブデッラー・ターイア 鶴戸聡訳

【5.26 発売】

▶「僕は牢獄にいた、ますます牢獄の中に。西洋には自由があるって？ どんな自由が？」母や兄への官能的な親密さに満ちた幼年時代を通りぬけて、フランス語の知に魅惑されたモロッコの若者は、地中海の両岸で「他者」となる。二重の疎外からの救済を描く著者の自伝的小説。

46 判上製／160 頁／2000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0872-4



もうひとつの時代

W・H・オーデン 岩崎宗治訳

【5.26 発売】

▶ 20世紀最大の詩人の一人が、1930年代後半の〈危機の時代〉に終生の伴侶となるチェスター・カルマンに捧げた詩集。人間の狂信と抑圧を軽妙に語り、第二次世界大戦の前夜を描きながら、世紀をこえて現代の混迷を〈予言〉し、そしてイエイツ、フロイトを追悼する……。

A5 判上製／240 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0860-1



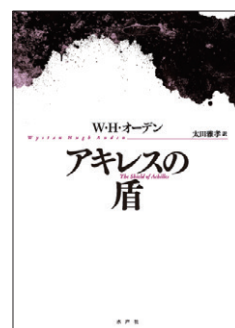
アキレスの盾

W・H・オーデン 太田雅孝訳

【5.26 発売】

▶ 今、世界各地でくりひろげられる破壊と流血、生命に対する抑圧は、オーデンの詩篇「アキレスの盾」に予言されているのではないだろうか？ 第二次世界大戦前夜の〈危機の時代〉に、自然と人間との関わり、さまざまな愛や美のかたち、そして負の歴史を繰り返す人間の弱さを見据えて祈る著者の代表作。

A5 判上製／232 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0859-5



ベルナール・ファイ ―ある対独協力知識人の肖像

《叢書言語の政治》

アントワヌ・コンパニョン 今井勉訳

【5.26 発売】

▶ 戦間期フランスの論壇の頂点にまで登り詰め、ブルストやジッドとも親しく交わった前衛芸術の擁護者、ファイ。輝かしい経歴を歩みながら、ナチス・ドイツへの協力を惜しむことも悔やむこともなかった反動知識人のスキャンダルの内幕とは？ 文学と政治が交錯する深層に迫る歴史叙述。

A5 判上製／304 頁＋別丁 8 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0869-4



運慶・ルオー・ブレイク

――岡本謙次郎美術批評集成

千石英世＋鈴木重雄編

【5.26 発売】

▶ 戦後から昭和後半にかけ、美術論・美術批評を精力的に寄稿し、展覧会のキュレーションも手がけた著者の代表作『運慶論』『ルオー』『ブレイク』、そして親交のあった美術家・斎藤義重、小説家・小島信夫をめぐるエッセイも付した渾身の批評選集。

A5 判上製／358 頁／6000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0855-7



水声社

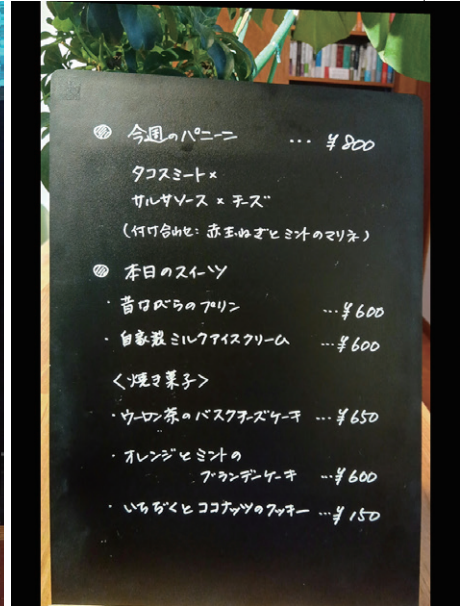
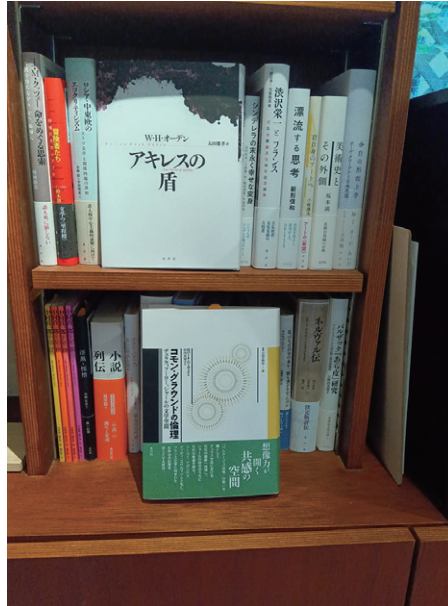
東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭
le Jardin des livres

本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』に初夏がやってきました。メジロ、キジバト、ヒヨドリ、シジュウカラも訪れます。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭に並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1 - 22 - 16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日（6月1日・6月15日）は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。）5月30日金曜日のみ午後4時閉店です。

臨時休業：4月24日木曜日は臨時休業です。（詳しくはInstagramをご確認ください。）

Tel：070 - 4171 - 0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭
le Jardin des livres

(広告)